

寄稿

浦川 和也

現在、佐賀県立美術館で、佐賀の豪商であった武富家（白山町武富家）の（子孫で東京都在住の武富秀夫さんから寄贈いただいた16世紀の明国製の官服（明服）と螺鈿琵琶を公開している。

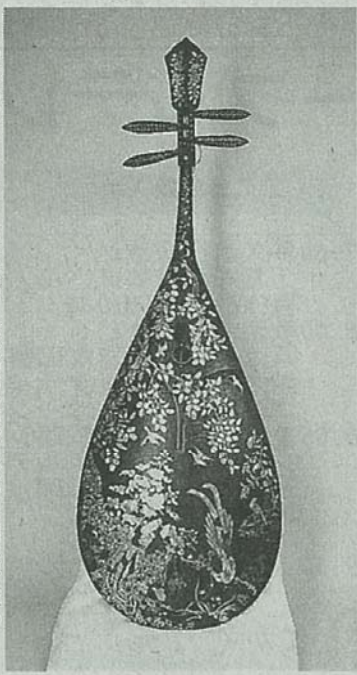
同家に残る記録『武富家伝記』によれば、白山町武富家は永禄期（1558〜70年）に渡日した「十三官」を始祖とする。賊に襲われ、乳母や従臣とともに南京の江浜をさまよっていたら、6歳の少年十三官は、瀬高（現福岡県みやま市）の商人小柳瀬兵衛に保護された。明服はこの際に「親の遺物」として託されたものと伝えられている。瀬兵衛のもとで成長した十三官は、天正期（1573〜92年）の争乱の中で名尾（現佐賀市大和町）にのかれ、2人の子（道智・道禎）をもつけた。その後、三溝村（現佐賀市神野）に移住し、長男道智が同村武富茂助の妹をめぐ

16世紀の明の官服と螺鈿琵琶

授を務めた武富垣南（1808〜75年）など著名な儒学者を輩出している。

螺鈿琵琶は、武富廉斎の父つたのを機に、一族の姓を武富とした。また、その後、白山町（現佐賀市白山）を拠点とするようになったため、後世「白山町武富家」と呼ぶようになった。

白山町武富家は、白山家・勢屯家・大財家の三家に分かれる。大財家からは大財聖堂を建立した武富廉斎（咸亮・1638〜1718年）、白山家からは弘道館教



「孝鳥絃」と命名された螺鈿琵琶。「16世紀前後の明国製で極めて希少」といわれる。

保護審議委員の野口朋子氏の期に来佐いただいた共立女子協力を得て全国的な範囲で専門家に依頼し、調査を進めた。東日本大震災後の大変な時

螺鈿琵琶は、武富廉斎の父つたのを機に、一族の姓を武富とした。また、その後、白山町（現佐賀市白山）を拠点とするようになったため、後世「白山町武富家」と呼ぶようになった。



県立博物館に寄贈された明服「赤緞子地表着」。16世紀の明服は日本で3件目の確認で、「特に官服は皆無に近く、大変貴重」とされる。

交流示す歴史的文化的財

螺鈿琵琶は、武富廉斎の父つたのを機に、一族の姓を武富とした。また、その後、白山町（現佐賀市白山）を拠点とするようになったため、後世「白山町武富家」と呼ぶようになった。

今回各分野の専門家からいただいた資料自体の評価と『武富家伝記』の記述内容が合致するとともに、資料自体も極めて希少で、質の高いものであることが判明した。